

## 日本人の「国際化」議論における日本特殊性の信念 — その内容と問題点 —

木 村 有 伸

はじめに

1. 日本特殊性の信念の強化
2. 日本特殊性の信念に対する先行研究の批判について
3. 「国際化」論にみられる日本特殊性の信念

おわりに

はじめに

本稿は、日本人の「国際化」に関する議論における、日本を特殊化・特殊視する傾向を問題にする。

日本人論の執筆者およびその読者、また、日本人論を受けて別の議論（日本人の「国際化」や異文化理解をめぐる議論）を展開する人々のあいだには、日本の文化、社会構造、日本人の行動・思考様式をめぐって二つの信念が存在する。一つは、それらには他国とは異なる独自の特徴・性格があると考え、日本的特殊性への信念。もう一つは、その日本的特殊性は他に類をみないほど独特で、外国人がそれを理解するのは難しいと考える、日本特殊性の信念である。つまり、日本を特殊化・特殊視する信念である。この二つの信念は混同して扱われがちだが、区別してとらえる必要がある。たとえば、日本的特殊性を論じていても、それが一般的な国民性論のなかに位置づけられているのであれば、それは他国の国民性を論じる文脈とそう違わないものになるはずである。つまり、日本人の国民性を論じるにしてもイギリス人の国民性を論じるにしても、それぞれの対象に対するスタンスは基本的には等しいということができよう。いままではそうした国民性の議論そのものに欺瞞性が指摘されているが<sup>1)</sup>、ここではその批判はひとまず置いておくことにする。しかし一方で、日本的特殊性には他国に類をみない独自性があり、日本人がアメリカ文化を理解するようには、アメリカ人は日本文化を理解できないと

いう立場をとる場合、その議論には日本特殊性の信念、すなわち日本の文化、社会構造、および日本人の行動・思考様式を特殊化・特殊視する信念が強く働いているということができよう。

日本人論が学問的な領域で批判の対象となるときは、つねにこの日本特殊性の信念が問題とされてきた。日本人論は、その多くが一般読者向けの雑誌や本で展開される議論ではあるが、その議論には学者・研究者が多く参加している。そのため、議論も学問的な装いを帯び、その主張は一般読者には学問的真理として受け止められやすい<sup>2)</sup>。当の著者が仮に「余技」のつもりで書いていたとしても、その議論で提示される「理論」や「概念」が、別の日本人論執筆者によって学問的な事実や前提として引用されることがある。先行の日本人論研究や論考は、その伝播力も懸念して、学問的な主張としてそれを批判してきたのである。

本稿も同様の批判的観点を有している。本稿では、特に日本人の「国際化」について論じられた議論に注目し、その議論において、日本人論で示された日本特殊性の信念が、事実や前提として用いられている点を例示する。また、それらの例から、そうした「国際化」の議論において日本文化や日本人がどのように位置づけられ、論じられているかをみていく。

日本人の「国際化」に関する議論は、1970年代から90年代初めにかけてさかんに行なわれた。「国際化」はもともと経済分野での用語であって<sup>3)</sup>、政治・経済の領域においても「国際化」に関する議論は行なわれているが、本稿で取り扱うのは、「『国際化』の時代に日本人はどのように行動すべきか」、「日本人はどうしたら『国際化』できるか」といった、人の国際化に主眼をおいた、文化面での議論である。そこでは「国際化」という言葉と並んで、「国際人」、「国際派」、「国際性」、「国際感覚」などの言葉も見出すことができる。この議論には、日本人論と同じように、学者・研究者が参加し、他に、海外滞在経験を持つ評論家、ジャーナリスト、官僚出身者、企業人などが参加した。

本稿では、日本人の「国際化」というテーマにおいて、日本が特殊であるという命題が前提となっており、それにもとづいて日本人の「国際化」の必要性が説かれている点を指摘するが、この点において先行の日本人論研究・論考が行なった批判とはその内容が異なることになる。その区別を明らかにするため、本稿では先行研究・論考が日本特殊性の信念に関して、どのような点を懸念していたのかという点を先に振り返っておくことにする。したがって本稿の構成は次のようになる。第1節では、日本人論において日本特殊性の信念がどのように強まっていったのかを、日本人論における論調の変化という点に注目して明らかにする。また、日本特殊性の信念を正当化する根拠となる、日本をとりまく諸条件についても取り上げる。第2節では、先行の日本人論研究・論考が指摘した、日本特殊性の信念の果たす機能について振り返る。それら研究・論考ではむしろ日本特殊性の信念が日本人にとって有利に働く局面が目され、イデオロギックとして批判されている。ここではそうした先行の批判における問題点も指摘する。そして第3節で、日本人の「国際化」論において日本特殊性がどのように表れているかを例示

し、「国際化」という文脈において日本文化や日本人がどのように論じられるかという点を明らかにする。

本稿で取り上げるこのような日本特殊性の信念に関する問題は、日本人の自己認識、自集団（＝日本人）認識を考えるうえで重要である。こうした信念の有無・強弱が、日本人の自己認識、自集団認識に大きな影響を与えている。したがって、「国際化」の文脈で日本文化や日本人がどう位置づけられているのかという点を明らかにすることは重要な意味を持つと考える。

## 1. 日本特殊性の信念の強化

### (1) 日本人論における論調の変化がもたらした影響

戦後日本における、日本人論（日本文化論）の論調の変遷を辿った青木保の次の指摘は、日本人論において日本特殊性の信念がしだいに強まっていったことを示すものである。

しかし、「否定的特殊性の認識」における「日本文化」の「前近代的」「非民主的」な自己評価から「歴史的相対性の認識」の時代までは、ある意味では、「開かれた」日本文化論がみられたのに対し、その「肯定的特殊性の認識」の時期に入るに従い、「日本文化」中心主義が台頭してきて、逆に「閉じられた」日本文化論に傾斜してゆくのは、「日本文化論」というものの性格を示すものではないかと思われる<sup>4)</sup>。

青木の分類では、「否定的特殊性の認識」の時期は1945～54年、「歴史的相対性の認識」の時期は1955～63年、「肯定的特殊性の認識」の時期は、さらに前期と後期が区別されて、前期が1964～76年、後期が1977～83年にそれぞれ相当する。それは敗戦の原因を日本の特殊性の前近代的・非民主的性格に求め、徹底的に批判し、反省した時期から、相対的な価値を認めるようになった時期を経て、やがてその特殊性に積極的な意味を与えるようになった時期をさしている。

日本の特殊性が前近代的・非民主的という位置づけをされていた時期には、それは否定され、改善されるべきものであった。しかし一方でそれは、そうした近代化論や民主化理論によって、日本社会は分析しうるものとしてとらえられることを意味した。したがって、この時期には日本社会に日本の特殊性は存在しても、それは後進性を示すひとつの特徴であって、欧米由来の理論で分析できないような日本独自のものとしては受け止められていなかった。

こうした傾向からの変化の萌芽は、すでに「歴史的相対性の認識」の時期に見出すことができる。文化人類学者の梅棹忠夫は、『中央公論』誌上で発表された論文「文明の生態史観序説」（1957年）<sup>5)</sup>のなかで、「しかし日本は、戦争にまけても、依然として高度の文明国である」

と述べ、その根拠として巨大な工業力、全国に張り巡らされた交通通信網、完備した行政組織、教育制度、教育の普及、豊富な物資、生活水準の高さ、高い平均年齢、低い死亡率、発達した学問、芸術を挙げた<sup>6)</sup>。そして、西欧の「一元的発展段階説」に代わって、諸文明の平行進化の可能性を示してみせた。

この背景には、日本経済の成長と日本社会の発展という現実面での変化がある。敗戦からの立ち直りは、必ずしも「否定的特殊性の認識」の時期に指摘されたような、日本の特殊性の否定・改善を必要としなかった。このことが民主化理論や近代化論とは異なる視点で日本社会を分析する必要性を生じさせた。

こうした相対化の観点を一気に押し広めることに成功したのが、文化人類学者の中根千枝である。中根は『中央公論』誌上で発表された論文「日本の社会構造の発見」(1964年)のなかで、和服を作るのに最も合理的な方法は、西欧伝来の「センチ尺」を用いるのではなく日本で昔から使われていた「鯨尺」を用いることであるという巧みな比喩をあげ、それと同様に日本社会の構造もそれに応じた理論を用いなければ正しく説明できないと主張した<sup>7)</sup>。この論文は日本の特殊性への評価を否定から肯定へ変えたという点よりも、それを分析するための新たな理論的骨子を提供したという点で、以降の日本人論の方向性に大きな影響を与えることになった。

日本特殊性の信念についても同様のことがいえる。中根は先の論文に加筆・修正する形で『タテ社会の人間関係』(1967年)を上梓するが、そこでは先行の論文では比較的抑えられていた日本特殊化・特殊視の傾向をはっきり示すことになる。たとえば「…という特徴は日本以外の他の社会ではまず見られない」という主張が、この著作の随所で見受けられるようになる<sup>8)</sup>。こうした日本の独自性・異質性を強調する箇所は、青木の「肯定的特殊性」という分類とは裏腹に、どちらかというとなら日本の特殊性に対して否定的な評価を下している場面が多い<sup>9)</sup>。そして次の箇所は、日本の特殊性の特殊化・特殊視傾向をはっきりと示している。

日本人は、論理よりも感情を楽しみ、論理よりも感情をことのほか愛するのである。少なくとも、社会生活において、日本人はインテリを含めて、西欧やインドの人々がするような、日常生活において、論理のゲームを無限に楽しむという習慣をもっていない。(中略)

論理のない世界に遊ぶ・・・ということは外国人にとっては一つの芸当とみえるかもしれない。(中略)しかし、この論理のない世界というものを、そして、それを社会生活のなかで、これほど機能させるということを、そうした慣習を共有しない人たちに説明することは実にむづかしい。

日本人、日本社会、日本の文化というものが、外国人に理解できにくい性質をもち、国際性が無いのは、実は、こうしたところ——論理より感情が優先し、それが重要な社会的機能をもっているということ——にその原因があるのではなかろうかと思われる。(傍点

引用者）<sup>10)</sup>

文化人類学者が「社会構造」の比較という形をとって展開したこの議論において示された日本特殊性の信念は、その与える影響も大きかったものと思われる。

中根『タテ社会の人間関係』と並んで「肯定的特殊性の認識」の時期の日本人論を代表する作品として位置づけられ、当時ベストセラーとなった、精神医学者土居健郎による『甘え』の構造』(1971年)においても、日本特殊性の信念が前面に押し出されている。この作品のなかで土居は「甘え」が日本語独特の語彙であるという認識から<sup>11)</sup>、「甘え」が日本人の精神構造を理解するための鍵概念であり、またこのような心理を許容する日本の社会構造を理解するための鍵概念であると説明する。このなかで紹介される、日本語の流暢なイギリス人女性がそれまでは英語で話していたのに、「甘える」という表現を使う箇所のみ日本語を使った、その理由を彼女はこれは英語では言えないからと答えたというエピソードは<sup>12)</sup>、読者に「日本人のことは外国人には理解しづらい」という考えを抱かせるのに十分な働きをしているように思われる。

この時期には学者・研究者によって、土居の「甘え」概念と同様、日本語に特有とされる語彙を概念として用いて日本人を説明する議論が多く提出された。ただ、そうした議論のすべてが日本特殊性の信念によって貫かれていたというわけではない。しかし、中根の「タテ」・「ヨコ」や土居の「甘え」のように、日本文化・日本社会・日本人を理解する鍵概念として、それらの概念も取り込まれていった。

## (2) 日本をとりまく諸条件

日本人論の執筆者およびそれを受け取る側には、日本特殊性の信念を支える、日本をとりまく諸条件がある。後述するように、それらは結局、比較のための準拠集団を恣意的に設定したことによる信念にすぎないが、比較にもとづいた客観的事実のように論じられる点に特徴がある。

日本特殊性の信念を支えるものは、まず、日本国内の同質性の認識である。その根拠とされるのが、第一に、日本人の単一民族説である。この際、その対抗概念としてアメリカの多民族社会が挙げられている。第二に、日本が島国であるという地理的条件である。この場合は、比較の相手として、ヨーロッパの陸続きの国々が選ばれる。第三に、鎖国という歴史的条件である。これもヨーロッパにおける国境をめぐる度重なる戦いの歴史が比較として挙げられることが多い。第四に、日本人が集団主義的で、欧米人が個人主義的だという説明である。これらの条件を挙げることによって、あたかも日本国内が同質であるかのように説明がされている。単一民族説を用いた説明のなかから、一例を挙げよう。

まず重要なのは、日本がほとんど単一民族で成り立っていることである。しかも、ただ単一民族というだけでなく、単一言語を喋り、ほぼ単一風俗であり、また単一に近い宗教を持っている。そうした中にどっぷりとつかり、お互いになれあって生活している。家族や親族ばかりではなく、学校でも、職場でも、また地域でも、そして日本中がそうである。

そのために、何事につけても、いわず語らずのうちにツーカーと通じ合い、みんながほとんど画一的といえるような考えや感じ方をしている。しかも、その程度はきわめて著しい。うえ、当然だとみなされている。小さな部族社会ならいざ知らず、一億人もいる一国内がほとんどそれで満たされているというのはほとんど世界に例がないといえよう。(傍点引用者)<sup>13)</sup>

この際に、欧米が対抗概念として想定され、それが多様性をもった社会として想定されている点に注目したい。しかし別の文脈で、たとえば日本の特殊性を非合理的、非論理的、集団主義的などと特徴づけるときは、その対抗概念として、合理的、論理的、個人主義的特徴をもった「欧米」の姿がきわめて一元的に論じられることになる<sup>14)</sup>。対抗概念として想定される欧米イメージはきわめて恣意的なものである。

次に挙げられるのが、日本の「周辺」性の認識である。これは特に日本語や日本人のコミュニケーション様式を取り扱う際において顕著である。ある語彙や表現が日本語に特有というだけで日本特殊性の根拠となるのは、日本人自身が日本語を「周辺」に位置する言語として取り扱っているからにはほかならない。その際、対抗概念となっているのは、「中心」としての欧米言語、特に英語である。

日本特殊性信念の根拠となる日本語の特徴として、①主語を頻繁に省略する点、②一人称・二人称の種類が非常に多い点、③肯定・否定の区別が文末に現れる点、④否定が二重にも三重にも使われる点、⑤複雑な敬語を持つ点などが挙げられている。これらはそれぞれ、①日本人の主体性の欠如、②自我の弱さ、③性格の曖昧さ、④不明確・不明瞭さ、⑤強い上下関係の意識を示すものとして論じられている。

また、日本人のコミュニケーション様式の特徴としては、非言語的コミュニケーションの多用、多弁を嫌う傾向、結論をばかす傾向、“Yes”を多用する傾向、会話における論理性の欠如、情緒的表現を好む傾向、文を構成せずに単語だけ話す傾向、型通りの挨拶しかできない傾向、知的ユーモアに乏しいことなどが挙げられている。日本語の特徴にしても、日本的コミュニケーション様式の特徴にしても、列挙されている例を見るに、そこにはそれらの特徴を取り上げ、論じる者の価値判断が介入していて、それは明らかに否定的なものである。こうした例には枚挙にいとまがないが、ここでは次の一例だけ挙げておこう。

日本人はおしなべて、論理には弱いようだ。日本語が論理性に欠けているから、そういう印象が強いのかも。英語は、概して、きわめて論理的な言葉である。つまり、あらゆる細部を、意図する意味を誤り伝えることなど、ほとんどありそうもないほど適確に表わすことができる言葉なのである。同じことが、大なり、小なり、他のヨーロッパの言葉にも言える。ところが、日本語は、直観の言葉であり、心情的な言葉である」と、ロンドン生まれで日本の大学で英文学を教えているA・ターニーは言う。(中略)

ともかく多少は論理性がなくても、日本人同士のホモジニアス（同質）な社会では以心伝心、目は口ほどにものを言うのである。たとえば、レストランに入っても、「僕、カレーライス」、「私、ハンバーグ」というふうな最小限の言葉で意味が通じる。「私は、ハンバーグを食べたいと思います」というふうにはならない。家庭でも、できるだけ短い言葉で用が足せるようになっている。「お茶!」とか、「僕、オフロ」。それを聞いて、だれも揚げ足を取って、「君はオフロなのですか。そうではないでしょう。オフロに入りたいのでしょう」とはまぜかえさない奇妙な文化が形成されている。言葉は、コミュニケーション手段として決定的な役割を果たしてはいない。言葉は、いわば“木の葉っぱ”程度にしか見なされないということだろうか。日本語はコミュニケーション手段として歴史的に軽視されてきたので、論理性が培われてこなかったのか、それとも論理性の必要なコミュニケーションが社会的に要求されてこなかったのか、言葉にもともと論理性がないかも、いずれかだろう。(傍点引用者)<sup>15)</sup>

この例で「以心伝心」という言葉が用いられているように、日本人のコミュニケーション様式に非言語的コミュニケーションの占める割合が多い根拠として、「以心伝心」、「腹芸」、「ツーカー」などの概念が用いられる。この非言語的コミュニケーションについては、異文化コミュニケーション研究の領域では現在でも異文化コミュニケーションの重要なテーマとして取り上げられている<sup>16)</sup>。そこでは、言語表現やしぐさがどれほど文化的コンテクストに依存しているかが問題とされ、言語によって「高コンテクスト／低コンテクスト」の差があると説明される。日本人のコミュニケーション様式は文化的コンテクストに高く依存するとして高コンテクストに位置づけられる。

さて、ここまで日本特殊性の信念を支える諸条件をみてきたが、日本の同質性を強調するにしろ、周辺性を強調するにしろ、比較の準拠集団として用いられているのはほとんど欧米に限られているのが特徴的である<sup>17)</sup>。しかも、そこで紹介されているのは、日本の同質性を語る際には、多様性に寛容で、個人個人を尊重する欧米の姿、日本語や日本人のコミュニケーション様式について論じる際には、雄弁性、論理的、合理的といった特徴をそなえた欧米言語文化の姿と、恣意的に選択され、かつきわめて理念化されたものである<sup>18)</sup>。したがってこれら日本特

殊性の信念を支える諸条件も、実際のところは非常に実証に乏しいものであるといえる。

## 2. 日本特殊性の信念に対する先行研究の批判について

日本の文化、社会構造、日本人の国民性は特異で、外国人にとってはわかりづらいものであるという日本人論の執筆者に見られるこうした信念に対して、先行の日本人論研究・論考ではどのような考察が加えられてきたか。これを明らかにするのが本節の目的である。まずは、その内容を振り返ることとする。そして、その批判内容の問題点を指摘する。

### (1) 先行研究・論考の批判内容

1980年代、日本人論がまだ学問的真理を帯びた言説として受け入れられていた時期にいち早くその方法論的問題点を批判した杉本良夫とロス・マオアは、日本人論のなかの「日本特殊独特説」、本稿でいうところの日本特殊性の信念が支配のイデオロギーとして機能する点を指摘している。彼らはそれを、対外的機能、対内的機能、自己充足予測の三点に区別して説明している。

対外的機能とは、海外諸国に対して「日本文化は日本人にしか理解できない」という命題を打ち出すことにより、国際問題における政府の対応、海外における日系企業の活動、個人レベルでの日本人の行動などをいずれも正当化する役割を果たすことをいう。杉本とマオアは、文化相対主義がここでは交渉を自分たちに有利なものにするための手段として用いられているとして厳しく非難している<sup>19)</sup>。

次に対内的機能だが、これはその役割がさらに細かく分けられている。第一は、日本の特殊性を優れたものとして評価するとき、その評価が国民に催眠術的な作用をもたらすという点である。第二は、政策決定や企業の労使交渉の場において、日本特殊独特説が、政府や企業に有利に機能するという点である。日本に独自のものであるという説明を用いることによって、政策や労務管理について、他国との比較によって生じる国民や労働者の不満を封じることができるのである。第三は、日常の社会生活においても、日本特殊独特説が現状を正当化する働きをするという点である。そして第四に、日本をユニークだと主張することが、異文化理解の専門家にとってお金を稼ぐ手段になっているという点である。日本特殊独特説が流行すれば、日本と外国との異なる点について知りたいという需要が高まる、彼らはそれを講演や自著で披露することによって利益を得るということである。したがって仮に日本と海外とは類似性が高いという考えが広まれば、この手の人々にとっては不利に働く、と説明されている<sup>20)</sup>。

最後に自己充足予測についてだが、これはアメリカの社会学者R・マートンの用いた概念で、ここでは、日本は特殊だといっているうちに当初は不正確であったはずのその予測が現実化し

てしまうことをさしている<sup>21)</sup>。杉本とマオアは、「日本社会は他の社会とちがってタテ社会だ、グループ主義の社会だ、コンセンサス主義の社会だ」という説が、たとえ、かりにデマであったとしても、巷に流布するにつれて、人びとがそれを信じこみ、その結果、こうした傾向に合わせて行動するため、『ウソから出たマコト』になっていくことも、可能性としては考えられる」と説明している<sup>22)</sup>。

ハルミ・ベフも、杉本らと共に日本人論（ベフは「日本文化論」と表記）のイデオロギー性を早くから非難した研究者の一人である<sup>23)</sup>。ベフは日本人論が繰り返しかれる理由に注目し、それを次のように説明する。

第一は、「大衆消費財」として日本人論が書かれるという説明である。ベフによれば、日本の大衆が望んでいるのは、世界に冠たる経済先進国として誇れる自画像であるという。大衆は自分ではその裏づけを取れないので、「文化論者」にそれをやってもらおう。ベフの見解では、「少々事実をまげてでも、日本文化のよさ、そしてユニークさが強調される文化像が日本人の自尊心をくすぐり、大衆にもてはやされる」という<sup>24)</sup>。西洋の日本研究者もこれに対応して、肯定的な論調の日本人論を書く。ベフはその理由として、西洋の日本研究者は基本的に日本びいきが多く、日本をバラ色のレンズで見たがり、その結果、日本が好意的に描かれているモデルになびくことになるという点と、研究で日本人とのつながりを保っておくために「日本人によく思われる」必要があるという理由をあげている。ベフによれば「日本がよくまとまりのとれた調和社会であるというモデルを主張する人の方が、日本の『恥部』に焦点を当てたモデルを主張する人よりも、日本では受けがいい」という<sup>25)</sup>。

第二に、これはベフがもっとも強調する理由であるが、日本人のアイデンティティの不安を払拭するために、日本人のユニークさを前面に押し出した日本人論が書かれるという説明である。日本人は明治以来、一貫して欧米文化を模範としてきた。それでも、公の場では「洋式」、私の場では「和式」という棲み分けができていたのだが、「国際化」の時代になって、「洋式」が私の領域にまで踏み込んできた。欧米文化の攻勢は日本人のアイデンティティの危機に直結する。ベフの説明では、「文化論は日本人、日本文化のアイデンティティを設定し、国際化した日本人にも、欧米化した日本文明にも、確固とした、ユニークな日本文化が残っていること、否、その日本文化が日本文明の核心をなしていることを証明し、そうすることによって、日本人に自信をもたせ、また安心感をいだかせる」という<sup>26)</sup>。日本のことは日本人にしか理解できないとする言説は何よりアイデンティティの危機から日本人を救い出すものである。

確かにそのような目的で、その民族の独自性が強調されるという例はある。たとえば、言語文化的にマイノリティに位置する民族が、支配的な言語文化に吸収されるような危機的な状況に立たされたときに、あえて自分たちの言語にこだわることもある。これは実験研究においても明らかにされている<sup>27)</sup>。そこでは、外集団から自分の言語を卑下された被験者は、積極的に

内集団に通用する言語やアクセントに切り替えるという反応を見せている。こうすることによって、みずからの社会的アイデンティティを肯定的なものに保とうとするのである<sup>28)</sup>。

第三に、比較を断ち切るためにユニークさを強調するという説明である。日本人は西欧諸国と比較されると、劣等感を抱く。ユニークなものは質的に異なるために、比較ができない。これまで劣等に位置づけられていたものが、等価となる。それによって、劣等感から解き放たれるとする説明である<sup>29)</sup>。以上がベフによる批判である。

最後にもう一人あげておきたい。戦後日本におけるナショナル・アイデンティティの欲望を満たす表象・言説について論じる阿部潔は、日本人論を文化ナショナリズムの言説と位置づけて、これを批判的に論じている<sup>30)</sup>。阿部は敗戦直後から80年代までに日本の特殊性へのとらえ方が否定的なものから肯定的なものへと変化したこと、80年代に一度批判にさらされた日本独自論の言説が90年代に新たな形で「特殊性」を自画自賛する色合いを強めたことに注目して、日本人論がいかに関心する日本人のナショナル・アイデンティティの確認に寄与してきたかを論じる。阿部の説明によれば、「政治的な次元で『ナショナルなもの=日本らしさ』を自己主張することを封印された『日本人』に対して、『日本文化論/日本人論』は、『日本人であること』をより文化的な次元で積極的かつ肯定的に是認することを保証してきた。その意味で『日本文化論/日本人論』という言説ジャンルは、戦後一貫してナショナル・アイデンティティの供給源であり続けてきたのである」ということになる<sup>31)</sup>。

## (2) 先行の批判の問題点

以上、日本人論における日本特殊性の信念がもたらす影響についての先行研究・論考の見解を振り返ってみたが、それらは、特殊性の信念が自民族優越論や文化相対主義を盾に取った支配イデオロギーに結びつくことに懸念を抱き、批判している点で共通している。確かに、この時期の政策において「文化」が特に重視され、大平正芳首相が「文化の国際化」を唱え（1979年）、中曽根康弘首相が「たくましい文化の国」と「国際国家」とを合わせて説いた（1982・1983年）ように、それが外交の重要な一手段として位置づけられたことは<sup>32)</sup>、日本特殊性の信念が、時の政府の戦略に組み込まれたことを示している。特に、大平政権下における『文化の時代』（1980年）と題する政策研究会の報告書においては、日本文化を「近代合理主義に基づく物質文明」の対概念として位置づけ、「近代を超える時代」に要請されるものとして積極的に評価している<sup>33)</sup>。この点においては、先行研究者の批判は適切であるといえる。

しかし、先に引用した箇所も含めて、ベフの次のような見解には、疑問をはさまざるをえない。

・・・「経済大国」を自負している日本人にとって、これらの特徴は日本人の自負心をそそるものでなければ、そのニーズを満たしたことになる。自負心を傷つけるような

もの、たとえば終戦直後の日本論のように日本文化をせめてやまないようなものは現代日本では受け入れられない<sup>34)</sup>。

この見解は果たして適切であろうか。先述したように、日本特殊性の信念の根拠となりうる、単一民族や島国、鎖国、あるいは日本語の問題が取り上げられる際、その論調はむしろそうした特殊性に対して否定的なものであった。同じように、日本人論によって注目されるようになったさまざまな概念、たとえば、「タテ・ヨコ」、「ウチ・ヨソ」、「甘え」、「イエ社会」などの概念が、読者によってどう解釈されたかについても検討の余地を残している。

その証拠に、先に引用した『「甘え」の構造』の著者、土居健郎は、のちに出された著書のなかで次のように述懐している。

例えば、本書が出版されてそれ程間もない頃から、わが国社会の仕組みで何かよからぬことが問題となる際に、「あれは甘えの構造だ」という声が聞かれるようになったことを多くの読者が覚えておられるだろう。（中略）たしかに本書の中で「甘え」の効果が芳しくない場合のことが論じられている。特に戦後は自立の重要性が声高く叫ばれるようになったので、そのような社会風潮を背景にして「甘えの構造」がよからぬことの代名詞にされてしまったのであろう。<sup>35)</sup>

土居の述懐に少し補足すると、土居自身は「甘え」を、日本人の社会関係においては積極的な役割を果たすものと評価したのであった。しかし、述懐にもあるようにそうした「甘え」概念を受け取った人々は必ずしも土居の思惑通りには解釈しなかったようである。

また、もう一つの根拠として、日本人論の「消費」の側面に注目した吉野耕作が、自身の聞き取り調査から、一般の読者が日本人論における自省論から賞賛論への移行を意識、確認していなかったことを明らかにしている点を挙げることができる<sup>36)</sup>。ここで吉野は、聞き取り調査の対象者が、学者・研究者の書いた日本人論を直接読むのではなくて、評論家やジャーナリスト、企業人によってより平易な言葉を用いて「再生産」された日本人論を読んでいることを明らかにしている<sup>37)</sup>。その過程で、先の諸概念に対する解釈も変わる可能性があるのである。

ベフについてはもう一点、欧米の日本研究者が日本びいきや日本人との関係を保つという理由から肯定的論調の日本人論の生産に貢献しているという見解にも問題がある。日本の成功の要因について分析した社会学者エズラ・F・ヴォーゲルの『ジャパン・アズ・ナンバーワン』（1979年）はともかくとして、日本について広範囲にわたる考察を行なった元駐日大使で日本学者のエドウィン・O・ライシャワーの『ザ・ジャパニーズ』（1977年）や、国際問題研究家Z・ブレジンスキーの『ひよわな花・日本』（1972年）を見るに、その論調は必ずしも日本人に好意

的なものばかりではない。また、日本の世界における孤立を指摘する議論や、日本の特殊性を滑稽なものとして描く日本人論も、やはり同時期の外国人によって書かれている。そして、それらはいずれも日本人に広く受け入れられたのである<sup>38)</sup>。

これらの点から、日本特殊性の信念が、別の議論においてどのように反映されているかを見る必要がある。特に、日本の特殊性は外国人にはわかりづらいとする信念が前提とされているがゆえに、その議題が重要なテーマとなっている議論に注目したいと思う。次節で取り上げる日本人の「国際化」というテーマはその最たるものではないかと思う。

### 3. 「国際化」論にみられる日本特殊性の信念

この節では、日本人の「国際化」論を例示し、日本特殊性の信念のもと、日本の特殊性がどのように論じられているかについて明らかにしたい。

日本人の「国際化」に関する議論は、日本の対外経済進出にともなって発生した諸外国との経済摩擦が大きな推進力となった。「文化摩擦」という言葉が用いられたように<sup>39)</sup>、経済的な摩擦をもたらす日本に対する非難の声や誤解に対して、文化面における相互理解の不足が原因として注目されるようになった。その際、日本人は自文化をどうとらえ、自国民の行動様式・思考様式をどのようにとらえたか、これを実際の議論から読み解くのが本節での目的である。

先述の先行研究では、「日本特殊独特説」が対外的に日本式の行動様式を正当化する根拠として用いられるという指摘がされていたが、当時の議論からはその逆の見解も見出すことができる。すなわち、日本特殊性の信念が、日本人に批判的・否定的な論調の議論に結びつく例である。それは政策においても見ることができる。次の例は、1974（昭和49）年に、「教育・学術・文化における国際交流について」という文部大臣の諮問に対して、中央教育審議会が提出した答申の内容である。

我が国は、過去一世紀の間、欧米諸国の文明を積極的に取り入れつつ、近代国家形成のために努力してきた。この間における我が国の目覚ましい発展は、国民の英知と不変の熱意によるものであり、特に現今の我が国は、欧米諸国と並んで国際社会に対して、大きな影響力をもつに至り、また、我が国に対する国際社会からの期待も大きなものとなっている。

しかしながら、このような近代国家形成の過程を顧みると、我が国は欧米諸国の知識・技術を個別に吸収することに急であって、諸外国に対する総合的な理解や我が国に対する諸外国の理解を深める努力に欠けるところがあった。

このような我が国の発展過程における特異な経緯は、地理的事情により、異質文化との日常接触が困難であったこともあり、往々にして、国民一般の国際理解や国際協調の精神の欠如をもたらし、独善にして閉鎖的な行動様式を生み、特に、近年における海外活動の拡大に伴い、我が国に対するいたずらな誤解と不信を招く背景となっている。（傍点引用者）<sup>40)</sup>

ここでは、日本に「特殊独特」とされる行動様式は、むしろ独善的で閉鎖的なもの、また、いたずらな誤解と不信を招くものとして否定的にとらえられている。また、諸外国に対する理解の努力と並んで、自国に対する諸外国の理解を深める努力が日本人に求められている点も特徴的である。たとえば欧米に対して日本人が仮に誤解や不信の念を抱いたとしても、それが欧米が日本に自文化を理解させる努力を怠ったためだという解釈にはならないだろう。だがその逆のことは堂々と語られているのである。そのような非対称性は、日本特殊性の信念にもとづくものであるといえよう。

同じような例として、「日本の条件」と題するテレビ番組を担当したNHKのプロデューサーの次の意見を挙げることができる。

戦後、一億一千万人の日本人は、日本語という世界共通語になりにくい言葉を使い、単一民族として、四方海に囲まれた島国で、独特の文化、伝統、国民性をもちながら暮らしてきた。明治以来、欧米からひたすら知識を摂取し、近代技術を採用入れ、自分のものにしてきたが、日本から文化を送り出す努力は、ほとんどしなかった。

以心伝心、和を重んずる風土の中で、日本人だけが住みやすい社会をつくって、外国人はよそものとして無意識のうちにわけへだてをしてきた。外国人の目から見ると、日本商品だけが洪水のように押し寄せるけれど、日本人は発言しない。日本という国が、なんとも気味の悪い存在に見えてくる。（傍点引用者）<sup>41)</sup>

この発言には、「以心伝心」、「和を重んずる」、「よそ」など、「肯定的特殊性の認識」の時期に、日本文化を理解する鍵概念として取り上げられた言葉が引用されている。しかし、それらはむしろ日本人の否定的側面を論じるために用いられている。これは先述の土居の述懐に通じるところがある。また、「外国人」の目から見た、明らかに偏見に満ちた日本人像が、日本人を批判する文脈で用いられている。ここで使われている「洪水のように」といった日本人の集団主義や同質性を示唆するメタファーは、他の「国際化」論においても見ることができる<sup>42)</sup>。

日本人に自文化を紹介する努力が欠けているために軋轢や葛藤が生じる、という見解は他の「国際化」論者においても見られる。その例を挙げる。

「鷹揚さ」は、自国の文化を他国に紹介するといった文化的活動にも出し惜しみをしない、というところにまで及ばなければならない。

だが、日本のそうした活動に対する予算の比率は、米国、フランス、イギリス、西独等に比べるとはなはだ低い。(中略)

これでは相変わらず、歌舞伎、能、生け花、茶道の日本、その一方でカメラ、ラジカセ、自動車そしてハイテクの日本、というきわめてワンパターンな日本像しか持ってもらえないのは当然と言わざるを得ない。(傍点引用者)<sup>43)</sup>

「日本人論」においてだけでなく、すべての領域において、文化の相違をこえて自分の社会を説明するという能力はおろか、それが必要だという意識さえない。(中略)

いや、日本の文学もかなり外国語に翻訳されており、日本人でノーベル賞をとった人もいるではないか、といわれるかもしれない。そういう考え方が一般的だが、実はそれこそが問題なのである。少しの翻訳書があるということは、体系的・比較論的な説明をしたということではない。しかもたいていの場合は、翻訳が外国人によるものであり、日本人は翻訳さえしていないわけである。そのかわりに、外国語からの翻訳や翻訳的紹介はおびただしくある。(傍点引用者)<sup>44)</sup>

文化交流の面からみると、日本はこれまで他国の文化を受け入れることだけに一生懸命で、こちらの文化を諸外国へ紹介し、伝えることには消極的であり過ぎた。(中略) アメリカ大統領の名前は大部分の日本人が知っていても、逆に大部分のアメリカ人は日本の首相の名前を知らないという調査結果がいつぞや発表されたことがある。これは、アメリカ人を責める前に日本人自らが日本を知らしめる努力の至らなさを反省すべきであろう。(傍点引用者)<sup>45)</sup>

いずれの例においても、責任を日本側に求める姿勢が見られる。二番目の例はより具体的で、海外における日本の書物の翻訳に、日本人が携わっていないことが批判的に述べられている。これも先にしたことと同じように、日本で読まれる外国の書物は、当該国の人間が日本語に翻訳してから日本へ送り出すものなのか、三番目の例も同様に、アメリカ大統領を知らない日本人がいるのは、アメリカがそれを日本人に知らせる努力を怠っているからなのかという逆の問いを設定すると、それがいかにいびつな見解であるかが明らかになる。これらの見解は一見、外国人に対する「善意」を示す解釈のようにも受け取れるが、実際のところは強い日本特殊性の信念、すなわち「日本人のことは外国人には理解しづらいのだから、われわれが理解させなければならない」という信念にもとづいた解釈であるといえる。したがって、「国際化」も日

本人にとっては他国民以上に難しい課題であると説明される。その例を挙げる。

国際という概念を個々の「ヒト」に当てはめて考えてみた場合の国際化は、知的・心理的・情熱的にコスモポリタンな態度とメンタリティーを個々人の中に作り上げていくこと、すなわち己を知り、自国を知り、そして世界を知り、しかも必ずしもすべての点で他者に同意することなしに互いに違和感を感じない精神構造・態度を確立することにあるといえよう。地理的、歴史的、人的に孤立してきた日本人が、このような精神構造・態度を確立するのは容易な業ではない。日本は、考え方や態度、体型や容貌においてお互いにほぼ完全に日本的であると感じている人びとだけによって形成されている社会である。しかも、日本人は、他のいかなる国民も話すことのない言語、他のいかなる国の一般教育課程の中にもほとんど取り入れられていない言語を話しているという点で、近代世界史上の主要指導国としてきわめて異例な存在であるといわねばならない。こうした背景を思うにつけても、日本人をコスモポリタン化し、ひいては日本社会を国際化するという目標を達成することが、きわめて難しい課題であり、十分な心構えが必要であることがあらためて痛感されるのである。<sup>46)</sup>

こうした信念にもとづけば、日本人の「国際化」に関する次のような結論は当然の帰結であるといえる。

このように、固有の文化的アイデンティティをもっているだけに、私たちは、どのようにすれば摩擦を最小にできるかということについて努力しなければならない。まず、「日本人とは」「日本国とは」という自己認識の努力が必要であろう。次に心掛けるべきは、私たちのあらゆる文化を翻訳することである。と同時に、私たちは鎖国的メンタリティーをもっているだけに、一方で外向けの自己紹介の努力を重ね、他方で異文化理解の努力もしていかなければならない。（傍点引用者）<sup>47)</sup>

日本を世界的視野で眺めず、なおかつ前述したような意味できわめて特異な存在である事実を明確に認識せずに、やみくもに「国際化」を唱えても正しい「国際化」を実現することにはならないだろう。ここで私の言う正しい「国際化」とは、まず日本が正しく諸外国を理解する努力を惜しまず、またそれ以上に大事なことは、ややもすると他国に理解されにくい要因を持つわが国を正しく世界に理解させる不断の努力をすることである。（傍点引用者）<sup>48)</sup>

一時代前とは違って、現在は西洋諸国の側が日本を理解し、日本に接近する手がかりを求めている。それに応えて、われわれの文化的行動様式の特徴を彼らに理解可能な仕方でも説明しようと努めることが、われわれの責務であるように思われる。(中略)

さらに、人間の文化的行動様式と言語構造は不可分の関係にあるのだから、日本的行動様式の特異性を日本語というこれまた極めて特殊な言語を参照枠として解釈するだけでなく、これをむしろ西洋語による西洋的思考に置き移して考えてみるのが、西洋人の立場での日本理解を促進する助けになることは明らかだろう。(傍点引用者)<sup>49)</sup>

この信念が強い排外意識をともなっていることは、以上の例からも明らかである。しかし、それは先行の日本人論研究・論考が指摘したような、日本人の優越感をくすぐるような言説においてのみ現れることではない。日本人に特異・独自であるだけに、日本人にそれを伝える努力を求めるといふ言説においても、この信念は現れるのである。

日本人に努力を求めるといふことは、そういう努力をしない日本人を否定的・批判的にとらえる傾向にむすびつく。日本人は自分の行動様式・思考様式はそのままでは「国際社会」では「不可解なもの」・「通用しないもの」として認識する。次の二例はその点をよく示している。これらは、いずれも異文化コミュニケーション論を担当とする大学教授によって書かれた文献からの引用である。

東京の私立大学で経営学を講じ、国連本部でも働いた経験をもつ先生が、こんな話をしていたのを思い出す。

「五、六名の日本人学生をレストランに連れて行き、彼らが注文する食事をどのように決めるのか、その決定の仕方を見ていると、学生の『国際性』の度合いを測ることができると思うんですよ。

二十種類以上もあるメニューのなかから、リーダーシップのありそうな学生がスパゲティー・ナポリタンを注文したりすると、残りの学生はほぼ右へ倣えとばかり、同じ料理を注文する。この場合は、国際性がいたって低いと判断する。これとは逆に、一人一人が仲間の学生の注文に影響されずに、それぞれが異なった料理を注文すると、彼らの国際性は高いと採点する。だが、ほとんどの場合は前者です」(傍点引用者)<sup>50)</sup>

日本人の私にもしばしば不愉快になるものに、若い人のにたにた笑いがあります。何のためににたにたしているのか分かりません。街中のお店でもときどきお客の質問に対してにこにこではなく、にたにたしている若い店員がいます。「にたにた」は「うすきみ悪い顔をして笑うことを表わす」(『新明解国語辞典』三省堂) ことですので、相手に不愉快な

感情を与える笑い方です。自信なさそうな不可解な笑い方も含まれます。反対に「にこにこ」は、余裕のある相手に好印象の与える笑い方です。「にたにた」と「にこにこ」を混同してはなりません。（引用者注：「好印象の与える」の箇所は原文ママ）

大学でも授業中であてて分からない場合などにも「にたにた」が見られます。本来分からない場合には困った顔をしなければなりません。相手に気を使ってのことと想像しますが、このような場合には相手より自分のことに気を使うべきでしょう。分からないのか分かるのかはつきりしないのは気味が悪い。まず国際的には通用しないものだという事、そして国内的にも通じない人たちがいるということ念頭に置くべきです。（傍点引用者）<sup>51)</sup>

いずれの例においても、登場する「日本人」があらかじめ不利な役割を担わされていることは明らかである。しかし、そうした著者にとって否定的・批判的に映る行動の主体を「日本人」に負わせることによって、日本人の「国際性」・「国際感覚」のなさを説く議論は多い。このように、日本特殊性の信念は、日本人に対して否定的・批判的な論調の議論にも反映されているのである。

#### おわりに

本稿では、日本人の「国際化」に関する議論における、日本特殊性の信念、すなわち日本を特殊化・特殊視する信念に注目し、それにもとづく日本文化や日本人の論じられ方を問題にした。「国際化」論に大きな影響を与えた日本人論での日本特殊性の信念は、欧米近代社会とは必ずしも一致しない日本社会の成長・発展を説明する議論のなかで強められていった。したがって、先行の日本人論研究・論考においては、肯定的論調の日本人論にみられる日本特殊性信念に注目が集まり、そのイデオロギー的機能が指摘されたが、そこでは日本人に対する否定的な論調の議論においてもその日本特殊性信念が機能している点が見逃されていた。そこで、本稿では「国際化」という転換点を機に、日本人に変化を促そうとする議論に注目し、そこに表れる日本特殊性の信念を明らかにした。「国際化」論では「外国人には理解が難しい」とする日本特殊性の信念は、むしろ日本人にとっては改善されるべきものとして位置づけられている。あるいはそれを外国人にも正しく理解されるように伝える努力が求められる。そのような努力を怠る日本人に対しては、日本人自身から「不可解である」、「国際的に通用しない」など、否定的・批判的な評価を下されることになる。この場合厳しい視線が「日本人」に対して向けられているといつてよいだろう。こうした視線が日本人の自己認識、自集団認識を規定しているということが考えられる。しかし、そこで言われている「国際化」とは結局欧米の価値観を基準にしているに過ぎず、導き出される日本的特殊性も欧米との比較、特に理念化された欧米と

の比較にもとづいたものにすぎない。その点で日本人論と同様の問題を有しており、まさに日本人論の言説がそこで「再生産」されている点を確認することができるのである。

「国際化」という言葉は最近ではあまり用いられなくなってきているが、ひきつづき「異文化理解」や「異文化コミュニケーション」という文脈で同様の議論が見受けられることがある。そうしたテーマでの言説にも注目する必要がある。

さて、本稿ではこうした日本特殊性の信念の内容を取り上げたが、長期的な視点としてはこのような自己認識のあり方を、集団間関係における個人のアイデンティティに関する文脈のなかに位置づけて理論的に分析したいと考えている。これについては次稿以降の課題とする。

## 注

- 1) 平野 (2000) 208-209 頁。
- 2) 小熊 (2000) 367 頁。
- 3) 喜多村 (1990)。
- 4) 青木 (1990; 1999) 160 頁。頁数は文庫版 (1999) のもの。以下同じ。
- 5) 梅棹忠夫「文明の生態史観序説」『中央公論』1957年2月号。梅棹によると、この論文に「序説」という言葉を追加したのは編集者であって、梅棹自身は、これに続けて本論を書く意図はなかったらしい。そのことはこの論文が再録された梅棹 (2002) に書かれてある。
- 6) 梅棹 (1957; 2002) 105-106 頁。頁数は (2002) のもの。
- 7) 中根 (1964)。
- 8) また、たとえば次の箇所は論文を本に取めるにあたって次のように書き改められている。

論文「日本の社会構造の発見」:  
「インドには『アンタッチャブル』(不可触賤民)といわれる下層グループがあるが、この人たちや、自分たちと異なる言語を話すグループ、あるいは異なるカーストに対する態度は、この日本人の態度とは一見似ているが違うものである。」〔同上、59-60頁〕

本『タテ社会の人間関係』:  
「インドには『アンタッチャブル』(不可触賤民)といわれる下層グループがあるが、他のカーストの人たちと、この特殊な人たちとの間の関係にさえ、日本人の『ヨソ者』に対するような一種の緊張関係、ひどい感情的差別の誇示はない。」〔中根 (1967) 49-50頁〕

このように、本では日本の特異性が強調されている。
- 9) この本が肯定的な評価を一方的に下しているわけではないことは、青木も言及している。青木、前掲書、94頁。
- 10) 中根、前掲書 (1969) 181-183頁。なお、引用文の「・・・」部分はダッシュにより次の一文が挿入されている。「しかもきわめて容易に日常生活の場で行なわれ、それが公的な関係に交錯するほど、社会生活全体のリズムのなかに、その重要な(潜在的とはいえ)部分として位置づけられている」
- 11) 『「縮み」志向の日本人』(1982年)の著者、イー・オリオンが指摘したように、土居の認識は英語との比較によって生じたものであり、韓国語にも「甘え」の語彙があって日常的に使われていることから、正確なものとはいえない。

- 12) 土居 (1971 ; 1981) 11 頁。頁数は第 2 版 (1981) のもの。
- 13) 稲村 (1980) 212 頁。
- 14) 杉本とマオアはこれを「西洋一元論」として、日本人論の方法論的問題点の一つとして挙げている。  
杉本・マオア (1982 ; 1995) 164 - 165 頁。
- 15) 寺谷 (1998) 60 - 61 頁。
- 16) 例として、石井ほか編 (1997)、鍋倉 (1997)、西田・グディカンスト (2002) などが挙げられる。
- 17) 中根の作品では、インドが比較の対象に選ばれているが、そのインド文化は、しばしば欧米文化の代理としての役割を担わされている。
- 18) 杉本とマオアはこれを「異質なサンプルの比較」として日本人論の方法論的問題点として指摘している。  
杉本・マオア、前掲書、161 - 162 頁。
- 19) 同上、136 - 138 頁。
- 20) 同上、138 - 139 頁。
- 21) これは "self-fulfilling prophecy" のことで「予言の自己成就」とも訳される。
- 22) 同上、140 頁。
- 23) ベフ (1987 ; 1997)。
- 24) 同上、62 頁。
- 25) 同上、94 頁。
- 26) 同上、139 頁。
- 27) Bouhris & Giles (1977) .
- 28) 社会的アイデンティティ (social identity) とは、「個人の自己概念の側面では、ある社会集団の成員であること、そしてその成員であることの価値や感情的意味づけをとまなう知識にもとづく自己概念」のことをさす。Tajfel (1978) , p. 63.
- 29) ベフ、前掲書、133 頁。
- 30) 阿部 (2001)。
- 31) 同上、61 頁。
- 32) 平野 (1985)。
- 33) 『文化の時代』 (1980)。
- 34) ベフ、前掲書、61 頁。
- 35) 土居 (2003) 3 - 4 頁。
- 36) 吉野 (1997) 210 頁。
- 37) 同上、192 頁。
- 38) 日本特殊性の信念を持ちながらも、日本人の外国人の手による日本人論への関心は高い。たとえば筑紫哲也編『世界の日本人観・総解説』 (1985 年) からその関心の高さがうかがえる。
- 39) 国際関係論を専門にする衛藤藩吉が「英語の culture conflict を訳したもの」として「文化摩擦」の語を用いている。衛藤 (1980) 9 頁。
- 40) 文科省ホームページより。
- 41) 玉井 (1981) 265 頁。
- 42) 栗田ほか (1987) 410 - 411 頁、天沼 (1989) 104 - 105 頁、寺谷、前掲書、175 - 176 頁など。
- 43) 天沼、前掲書、79 頁。
- 44) 金山 (1989) 26 - 27 頁。

- 45) 及川 (1990) 164 頁。
- 46) 加藤ほか (1987) 424 頁。
- 47) 矢野 (1986) 166 頁。
- 48) 及川, 前掲書, 145-146 頁。
- 49) 木村 (1993) 31-32 頁。
- 50) 井上 (1990) 11 頁。
- 51) 大崎 (2000) 144-145 頁。

## 参考文献

- 青木保 (1990) 『「日本文化論」の変容-戦後日本の文化とアイデンティティー』中央公論社。のちに中公新書, 1999 年。
- 阿部潔 (2001) 『彷徨えるナショナリズム』世界思想社。
- 天沼香 (1989) 『日本人と国際化』吉川弘文館。
- イー・オリョン (1982) 『「縮み」志向の日本人』学生社。
- 石井敏ほか編 (1997) 『異文化コミュニケーション・ハンドブック』有斐閣。
- 稲村博 (1980) 『日本人の海外不適應』日本放送出版協会。
- 井上雍雄 (1990) 『日本人の常識と社交性-外国人とのコミュニケーションを良くするために』創芸社。
- 梅棹忠夫 (2002) 『文明の生態史観ほか』中央公論新社。
- 衛藤藩吉 (1980) 「序論 文化摩擦とは?」同編『日本をめぐる文化摩擦』弘文堂, 1-45 頁。
- 及川正博 (1990) 「日本の「国際化」と異文化理解」寛文生・飛田就一編『国際化と異文化理解』(国際摩擦と国際理解 3) 法律文化社, 141-165 頁。
- 大崎正瑠 (2000) 『日本人の「国際化」感覚』三一書房。
- 小熊英二 (2000) 「解説 「根源的」な問いがもたらすもの」杉本良夫・マオア, ロス編『日本人論に関する 12 章』ちくま学芸文庫, 367-377 頁。
- 加藤幹雄ほか (1987) 「国際化の促進」総合研究開発機構編『事典 1990 年代日本の課題』三省堂, 421-452 頁。
- 金山宣夫 (1989) 『国際感覚と日本人』日本放送出版協会。
- 喜多村和之 (1990) 「「国際化」思想の展開-1960 年代から 80 年代まで」澤田・門脇編『日本人の国際化-「地球市民」の条件を探る』日本経済新聞社, 28-47 頁。
- 木村敏 (1993) 「関係としての自己」濱口恵俊編『日本型モデルとは何か-国際化時代におけるメリットとデメリット』新曜社, 31-43 頁。
- 栗田靖之ほか (1987) 「日本人の国際化」総合研究開発機構編『事典 1990 年代日本の課題』三省堂, 381-419 頁。
- 杉本良夫・マオア, ロス (1982) 『日本人は「日本的」か-特殊論を超え多元的分析へ』東洋経済新報社。のちに加筆『日本人論の方程式』ちくま学芸文庫, 1995 年。
- 玉井賢二 (1981) 「「日本の条件」のめざすもの-あとがきにかえて」NHK 編『日本の条件 1 序論』日本放送出版協会, 255-278 頁。
- 筑紫哲也編 (1985) 『世界の日本人観・総解説』自由国民社。
- 寺谷弘壬 (1998) 『国際感覚を創る-異文化理解のススメ』時事通信社。
- 土居健郎 (1971) 『「甘え」の構造』弘文堂。のちに第 2 版, 1981 年。

- (2001) 『続「甘え」の構造』 弘文堂。
- 中根千枝 (1964) 「日本の社会構造の発見－単一社会の理論」『中央公論』1964年5月号（第79年第5号）、48－85頁。
- (1967) 『タテ社会の人間関係－単一社会の理論』 講談社現代新書。
- 鍋倉健悦 (1997) 『異文化間コミュニケーション入門』 丸善。
- 西田司・グディカンスト, W. B. (2002) 『異文化間コミュニケーション入門－日米間の相互理解のために』 丸善。
- 平野健一郎 (1985) 「戦後日本外交における〈文化〉」 渡辺昭夫編『戦後日本の対外政策』 有斐閣, 339－366頁。
- (2000) 『国際文化論』 東京大学出版会。
- 文化の時代研究グループ (1980) 『文化の時代』（大平総理の政策研究会報告書－1） 大蔵省印刷局。
- ベフ, ハルミ (1984) 「日本文化論は大衆消費財」『季刊人類学』（京都大学人類学研究会）第15巻第1号, 119－126頁。
- (1987) 『イデオロギーとしての日本文化論』 思想の科学社。のちに増補新版, 1997年。
- 矢野暢 (1986) 『国際化の意味－いま「国家」を超えて』 日本放送出版協会。
- 吉野耕作 (1997) 『文化ナショナリズムの社会学－現代日本のアイデンティティの行方』 名古屋大学出版会。
- Bourhis, R. Y. and Giles, H. (1977) The language of intergroup distinctiveness. In H. Giles (ed.), *Language, Ethnicity and Intergroup Relations*, London: Academic Press.
- Brzezinski, Z. K. (1972) *The Fragile Blossom: Crisis and Change in Japan*, New York: Harper and Row.  
= (1972) 大膳人一訳『ひよわな花・日本－日本大国批判』サイマル出版会。
- Reischauer, E. O. (1977) *The Japanese*, Cambridge, Mass.: Belknap Press. = (1979) 國弘正雄訳『ザ・ジャパニーズ』文藝春秋。
- Tajfel, H. (1978), Social categorization, social identity and social comparison. In H. Tajfel (ed.), *Differentiation between Social Groups: Studies in the social psychology of intergroup relations*, London: Academic Press. 61-76.
- Vogel, E. F. (1979) *Japan as Number One: Lessons for America*, Cambridge, Mass., London: Harvard University Press. = (1979) 広中和歌子・木本彰子訳『ジャパン・アズ・ナンバーワン－アメリカへの教訓』TBSブリタニカ。

（木村 有伸，立命館大学国際関係研究科研究生）

## The Japanese uniqueness tendencies in the essays about cosmopolitan Japanese

In this paper I examined the tendencies of the Japanese uniqueness in the essays which are about how Japanese can be cosmopolitans. Japanese have found themselves unique, and explained by themselves how unique they were in the essays about the Japanese culture which are called “Nihonjin-ron”. The strong beliefs were also reflected in the essays about cosmopolitan Japanese which are called “Kokusai-ka” essays. First, I examined the background of the Japanese uniqueness tendencies in “Nihonjin-ron”. They stressed the uniqueness of the Japanese culture, social structures in Japan, and Japanese people to explain the different development of Japan from America and Europe. These explanations are criticized by some Japanologists because of their lack of demonstration, and the Japanologists also pointed nationalistic tendencies of these explanations out. However, the tendencies of the Japanese uniqueness were obviously used in the “Kokusai-ka” essays to explain how inexperienced Japanese were when they went abroad or when they met people from foreign countries. There we can see how the Japanese have criticized the Japanese themselves. Through these examples I demonstrated an aspect in which the Japanese uniqueness beliefs function negatively against Japanese themselves.

(KIMURA, Arinobu, Doctoral Research Student, Graduate School of International Relations, Ritsumeikan University)